

## パラスポーツの振興について

- アメリカでは、「障害者」ではなく「**スペシャルニーズがある人**」という扱いであり、子供の頃からそのような環境で育つことが、**バリアがない社会につながる**。
- どうしてもイベントのような単発ものが多く、**どうやって事業をプログラム化するか、事業の中で障害のある方に目標をもって成長してもらうかが重要**。
- 障害のある方の中には、**スポーツを行う余裕までない方もいる**と思うが、**スポーツは人々に様々な効果をもたらす**。施設も活用しながら、**障害のある方にもアプローチ**できるとよい。
- 障害者の**ハブ施設、サテライト施設、社会資源**という3段階のネットワークが**重要**であり、**役割分担が裾野を広げる**。より浸透していくためには、**体系化した仕組み**が必要。
- **スポーツ指導員は、確保も重要だがどう処遇するかも難しい**。
- **障害特性は非常に多様**であるため、**福祉とスポーツの総合力**が求められる。
- 今は「支える側」でもいつかは「**支えられる側**」になる。**相互理解を深める取組が重要**。

## 子供のスポーツ振興について

- スポーツに対する「**やる気がない・恥ずかしい**」という感情には、「**できないこと**」が起因しているのではないかと。「**できなかったことができるようになる**」「**達成感**」を醸成するのが**教育関係者の責務**。
- 「**できなかったことができるようになる**」ことは、子供にとっても高齢者にとっても大きな喜びを感じる瞬間であり、子供の教育の中では、「**比べない**」ことと併せて**重要なこと**である。
- 運動が苦手な理由として、**他者との比較によるコンプレックス**が考えられる。「**子供の居場所**」や「**遊びスポーツ**」といった間口の広い在り方を検討していくべき。
- 子供の遊び環境が少なく、特に**都心部・住宅密集地**では、**近所からの騒音苦情により外で部活動ができない**こともある。学校と**周辺コミュニティにおける連携や関係性構築の仕組み**が必要。
- 「**疲れないスポーツ**」も良いが、「**疲れること**」の効果もあるため、**間口を広げつつ同時に進めたい**。また、**子供と親を同時にターゲットにした仕組みや機会**があるとよい。
- 子供のスポーツ環境づくりは、**教育庁だけではなく、生活文化スポーツ局、地域スポーツ全体を挙げて改革**していかないと実現できない。

## 女性のスポーツ振興について

- 「**女性**」を**あえてピックアップ**しなければならないということが**現状の課題**。フラットな社会の実現には、**あと何が足りないのか**。
- 女性のスポーツ実施率の低さには**仕事や家事・育児の負担が要因**と考えられるが、**女性が働きやすい環境整備**と併せて、**職域でのスポーツ実施を推進**することによって、**女性の健康保持・増進**ができる点にも**着目する必要**がある。
- 部活動について、**共学と女子校では競技のレベルも種目も違う**。女子校に入ってから**スポーツが楽しくなる**というケースもあり、**やり方や一緒にやる人などの環境次第でスポーツに対する思いは大きく変わる**。スポーツをする「**機会**」とスポーツから得られる「**自信**」が重要。